

李義山詩に詠われた司馬相如

— 隱喩としての自畫像 —

詹 滿 江

はじめに

詩人が過去の詩人を慕う、という例は少なくない。例えば、李白は謝朓を慕い、杜甫は庾信を慕った。では晩唐の李商隱は、と考えたとき、李杜ほどには顯著に特定の詩人への敬慕の様子は窺われない。それでも、李商隱の詩風そのものが過去のどの詩人の流れを汲むものかという議論はしばらく措くとして、その詩作の中で直接言及される過去の文人から、特に注意を喚起する人物を挙げるとするならば、やはり前漢の司馬相如ということになるであろう。李商隱は駢文の作り手でもあったので、その点から見ても司馬相如の存在は無視できないものであったはずであるが、小稿においては、もっぱら詩に限定して、李商隱が司馬相如をどのように詠ったか、他の詩人の詩と比較しつつ考察してみたい。

一

本来、人間はいろいろな側面を持つものであるが、その人から受け取るイメージとなると、決まったカラーが與えられることが多い。屈原といえは憂國の詩人、陶淵明といえは隱逸の詩人ということとくた。

李義山詩に詠われた司馬相如

ところが、司馬相如という人物は特定のイメージで括りにくい。一つの側面では括ってしまえない。例えば、天下國家を憂える詩には屈原を登場させ、辭職して田舎に退く詩には陶淵明を登場させる、というような典型的な詠われ方はされないのである。

そこで、司馬相如を四つの側面に分けて考えてゆくことにした。一つは、宮廷で活躍する契機ともなった、賦の作者としての側面。二つめは、卓文君と駆け落ちしたロマンスのヒーローとしての側面。三つめは、四方の壁しか立っていないなかつたという貧者としての側面。四つめは、消渴を患つたという病人としての側面である。

まず、第一の側面、賦の作者としての司馬相如を詠った詩について見てゆこう。

およそ司馬相如を詩に詠う嚆矢となつたのは、管見の及ぶかぎりでは晋の左思である。

著論準過秦 論を著すは過秦に準じ
作賦擬子虛 賦を作るは子虛に擬す

〔詠史詩〕八首其(一)

言論準宣尼 言論 宣尼に準じ
辭賦擬相如 辭賦 相如に擬す

洛陽の紙價を高からしめた賦の上手、左思の司馬相如への傾倒のさまが窺われる。

〔詠史詩〕八首其四

司馬相如の文才を高く評價する詩人は多い。梁の吳均は、

長安城中諸貴臣

爭貴儒者席上珍

復聞梁王好學問

輕棄劍客如埃塵

吾丘壽王始得意

司馬相如適被申

大才大辯尙如此

何況我輩輕薄人

〔行路難〕五首其二 部分

と詠い、儒者としては春秋學者の吾丘壽王を、文人としては司馬相如を擧げて、彼らほどの才をもつてしても見出されにくかったのだから、まして自分のようなつまらない者など、と謙遜している。

初唐の駱賓王は、

馬卿辭蜀多文藻

揚雄仕漢乏良媒

〔帝京篇〕

と、相如を揚雄と並べて評價し、中唐の韓愈は、

爲文無出相如右

謀帥離居郤縠先

〔酬別留後侍郎〕

と、文才は司馬相如が最も優れ、武將としては春秋時代の郤縠が一番

であると詠った。

自分を司馬相如に喩えて詠う詩人も多い。皇甫曾は、

聖主好文誰爲薦

閉門空賦子虛成

〔奉寄中書王舍人〕

と、自分をまだ天子に見出されない司馬相如に喩え、それとなく王舍人の引き立てを促しているようである。

杜甫は、

草玄吾豈敢

賦或似相如

〔酬高使君相贈〕

と詠い、揚雄のように『太玄』を著すことはとてもできないとしても、賦ならばあるいは司馬相如のようにできるやもしれぬと自身の文才を恃んでいる。

白居易は、

兔園春雪梁王會

想對金曇詠玉塵

不知客右坐何人

〔雪中寄令狐相公兼呈夢得〕

と、令狐楚のところの宴會を梁の孝王のサロンに喩え、司馬相如に喩うべき自分はその會に出していないが、本来自分が坐るべき席にはどなたがお見えかと詠う。

人を司馬相如に喩えて詠う詩もある。王維は、

獻賦何時至

獻賦 何れの時にか至り

明君憶長卿 明君 長卿を憶はん

〔送嚴秀才還蜀〕

と、嚴秀才を相如に喩え、君の作品はいつかは天子の目に止まって、召し出されるだろうと詠った。

劉沓虚は、

相如有遺草 相如 遺草有らん

一爲問家人 一たび爲に家人に問へ

〔寄江滔求孟六遺文〕

と、亡くなった孟浩然を司馬相如に喩え、漢の天子が茂陵に隠退した相如に使いを遣つて、その著作を求めたように、江滔に頼んで孟浩然の遺作を求めた。

ときには人の文才を稱えて、司馬相如よりも勝ると詠われることもある。

梁の劉孝威は、元帝を稱えて、

博聞強子政 博聞 子政よりも強く

高才陵長卿 高才 長卿を陵ぐ

〔奉和簡文帝太子應令〕

と、劉向よりも博識で、司馬相如よりも文才があると詠った。

王維は、

染翰過草聖 翰を染めては草聖に過ぎ

賦詩輕子虚 詩を賦しては子虚を輕んず

〔戲贈張五弟諶〕三首其二

と、張諶の書は王羲之よりもうまく、詩は司馬相如を輕んじるほどうまくと詠っている。

崔宗之は、李白を褒めて、

李義山詩に詠われた司馬相如

袖有七首劍 袖に有り七首の劍

懷中茂陵書 懷中 茂陵の書

双眸光照人 双眸 光 人を照らし

詞賦凌子虚 詞賦 子虚を凌ぐ

〔贈李十二白〕部分

と、その詞賦は司馬相如をしのぐと詠う。

では、李商隱は、賦の作者としての司馬相如をどのように詠っているであろうか。

まず、自分を司馬相如に喩えている例を挙げる。

未至誰能賦 末に至り誰か賦を能くせん

中乾欲病瘡 中は乾き瘡を病まんと欲す

〔送從翁從東川弘農尚書幕〕

從翁すなわち叔祖の某が、楊汝士の幕僚として赴任するのを送った詩に、自分を司馬相如に喩え、梁の孝王のサロンに一番遅くやってきた司馬相如のような私は、どうして賦など作れましよう、身内は渴いて消渴の病いになりそうなのですからと詠う。「未至」とあるのは、謝惠連の「雪賦」に「相如末に至り、客の右に居る」とあるのを踏まえている。開成元年（八三〇）十二月、李商隱二十五歳、まだ進士に及第せず、濟源の母のもとへ歸っていたころと作とされる。賦の作者としての司馬相如を意識しているものの、むしろ消渴の病いのほうに重點がある。赴任してゆく叔祖を羨しく思うとともに、仕官への望みの切實なさまが感じられる。

また、大中三年（八四九）、李商隱は京兆の尹のもとに一時身を寄せていたときの詩に次のように詠う。

幾時綿竹頌 幾時か綿竹頌もて

擬薦子虛名 子虛の名を薦めんと擬ん

(令狐舍人説昨夜西掖翫月因戲贈)

中書舍人の令狐綯が、ゆうべ西掖でお見見をしたとおっしゃるので、戯れに詩を贈り、その昔、楊莊が揚雄の「綿竹頌」を誦したら、天子が司馬相如の文に似ているとおっしゃったように、いつ私の名を天子に薦めて下さるのでしょいかと、令狐綯の引き立てを促している。

賦の作者としての司馬相如を詠う場合、司馬相如のことを直接に詠う場合は讚美の對象となるが、相如に自分や他人を喩えて詠うと、その表現は屈折し、仕官を望む氣持が托されたりするようになる。司馬相如は、その才を天子に見出された成功者である。その點を抜きにしては、賦の作者としての司馬相如を捉えられないようである。李商隱も他の詩人も賦を作る才能をもった司馬相如から、當然かつ容易に政治的成功者となった司馬相如を連想する。當時の社會、とくにその官僚體制にあつては、こうした方向になるのも肯ける。

李商隱の詩に、人を司馬相如に喩えているものもある。

君王曉坐金鑾殿 君王 曉に坐す金鑾殿

只待相如草詔來 只だ待つ相如の詔を草し來るを

(贈庾十二朱版)

大中八、九年(八五四、五)ころ、李商隱は梓州の柳仲郢の幕下にあり、翰林學士の庾道蔚に朱版とともに詩を贈った。天子の側近として仕える庾道蔚を司馬相如に喩えている。天子の側に仕えることなど、一生叶わなかつた李商隱にとって、中央に仕える人を政治的成功者の司馬相如に喩えることはできても、自分に近づけて詠うには司馬相如は遠い存在でありすぎたようである。たとえ李商隱自身、自己の才能を恃むところ篤かつたとしても、司馬相如は榮達を極めた人間であ

り、李商隱は一生不遇だった人間である。この點での懸隔は到底埋められない。李商隱は司馬相如を左思のように敬慕したり、駱賓王や韓愈のように客觀的に評價したりはしない。むしろ、自分に引き付け、距離を縮めて詠いたがった。しかし、そうするには、賦の作者としての司馬相如は李商隱からみていささか遠すぎたようである。

二

司馬相如の第二の側面、卓文君とのロマンスを詠う詩は多い。琴を奏して卓文君を惹きつけ、驅け落ちした司馬相如は、いかにも人間臭い。賦の作者として天子に仕えたという一面と對照的に、禮教に悖るまでして戀を成就させた無鐵砲な一面は、後世の詩人たちに親近感を抱かせこそすれ、非難されはしなかつたようである。

まず、司馬相如と卓文君との出會いを詠じた詩を挙げよう。

梁の王僧孺は、

長卿幸未匹 長卿 幸ひに未だ匹あらず

文君復新寡 文君 復た新たに寡なり

(見貴者初迎盛姬聊爲之詠)

と、ある貴人が初めて美人を迎えたことを相如文君の邂逅に喩える。

杜甫は、

卓氏近新寡 卓氏 近ごろ新たに寡なり

豪家朱門扃 豪家 朱門扃さす

相如才調逸 相如 才調逸れ

銀漢會雙星 銀漢 雙星會す

(奉酬薛十二丈判官見贈)部分

と、薛判官の新婚のさまを相如文君のそれに喩えている。

李賀は、

長卿懷茂陵 長卿 茂陵を懷ひ

綠草垂石井 綠草 石井に垂る

彈琴看文君 琴を弾いて文君を看

春風吹鬢影 春風 鬢影を吹く

梁王與武帝 梁王と武帝と

棄之如斷梗 之を棄つること斷梗の如し

惟留一箇書 惟だ留む 一箇の書

金泥泰山頂 金泥 泰山の頂き

〔詠懷〕二首其一

と、琴を弾いて卓文君に挑む司馬相如を詠っている。ただ、この詩の主眼は、「懷才不遇」すなわち才がありながら爲政者に顧みられなかった司馬相如（李賀は相如を政治的成功者とはみないようだ）を詠うことにあるが、その人物像を描く素材として、卓文君とのロマンスが風流を解する好もしい一面として詠いこまれているようである。

驅け落ちした後、二人で仲良く酒屋を營んだことも詠われている。梁の庾肩吾は、

應龜識季主 龜を懸くるは季主と識り

傍酒見相如 酒を傍ぐるは相如と見る

〔看放市〕

と、市場の様子を詠うなかで、龜がかかっていたら占い師の司馬季主だとわかるし、酒の看板をみれば司馬相如の店だとわかると詠う。酒屋といえば司馬相如の店、まるで相如は酒屋の代名詞のようである。

張祐は、

成都滯游地 成都 滯游の地

李義山詩に詠われた司馬相如

酒客須醉殺 酒客 須く醉殺すべし

莫戀卓家壚 戀ふ莫かれ卓家の壚

相如已屑屑 相如 已に屑屑たり

〔送蜀客〕

と、蜀へ行く人を見送って、蜀は歡樂多く長居しがちな土地だから、酒飲みは必ずや酔いつぶれてしまおう、それに、いくら別嬪だからといって、卓文君の酒屋へ足を向けてはいけない、どうせもう亭主の司馬相如がそばであくせく働いているさと詠っている。

相如文君の愛情の濃やかなさも詠われている。杜甫は、

茂陵多病後 茂陵 多病の後

尙愛卓文君 尙ほ愛す卓文君

〔琴臺〕

と、司馬相如の舊居の北にある琴臺を訪れたときの詩に、司馬相如は病氣がちな身でも、卓文君を愛したと詠った。

錢起は、

稚子只思陶令至 稚子 只だ思ふ 陶令の至るを

文君不厭馬卿貧 文君 厭はず 馬卿の貧なるを

〔送褚大落第東歸〕

と、落第して故郷へ歸る褚大を見送る詩に、君の子らは、園田の居に歸った陶淵明のように高潔な君の歸りを待ちこがれているだろうし、君の奥さんだって、卓文君が司馬相如が貧乏なのを厭がらなかったように、君を思っているだろうと詠っている。

仲睦まじい相如文君でも、波瀾がなかったわけではない。史實かどうかは措くとして、相如が茂陵の女を迎えようとしたところ、文君が

怒って、「白頭吟」を作り、妾を迎えるというならば離婚するとの意を詠つたので、相如は女を迎えるのを諦めたという話が傳わっている。このエピソードによって、司馬相如と卓文君の夫婦像はいよいよ卑近なものとなつたと思われる。それゆゑ後世の詩人たちは相如文君を美化し理想化する方向へむかうことなく、身近な存在として親近感を抱くことができたのではないだろうか。

卓文君の嫉妬を詠う詩がある。

死恨相如新索婦 死だ恨む相如新たに婦を索むるを
枉將心力爲他狂 枉げて心力を將つて他に狂せらる

と、元稹は「箏」の尾聯で、夜ごとに箏を奏する莫愁が、新しい女に心移した男を恨んで氣も狂わんばかりになるさまを、司馬相如が茂陵の女を迎えようとしたことに喩えて詠っている。

逆に卓文君が嫉妬される側、といっても男が嫉妬するのではなく、別の女に嫉妬される側として詠われることもある。

孟郊は、

欲別牽郎衣 別れんと欲て郎が衣を牽く
郎今到何處 郎 今 何處にか到らん

不恨歸來遲 恨まず歸り來ること遅きを

莫向臨邛去 臨邛に向つて去ること莫かれ

(古別離)

と、旅立つ男への女心を詠い、お歸りが遅くてもかまいません、でも臨邛へはいらっしゃらないで、そこにはなんでも、男心を惹きつける卓文君とかいふ女がいるさうだからと詠う。女の嫉妬という概念が普遍化されると、「臨邛」という言葉だけでそのイメージを喚起でき、もはや嫉妬の主體はどの女であろうと問題ではなくなるのであろう

か。

それでは李商隱は、相如文君をどのように詠っているであろうか。蜀の風物として相如文君の酒屋を詠う詩がある。

卜肆至今多寂寞 卜肆 今に至るまで寂寞多く
酒壚從古擅風流 酒壚 古從り風流を擅にす

(送崔珏往西川)

大中元年(八四七)、桂州の鄭亞の幕下にあつて、後輩の崔珏が西川へ赴くのを送り、昔の嚴君平が占いをしていた易占舗は今でも淋しげに残っているし、かつて司馬相如と卓文君が營んだ酒屋も、以來當時さながらの風流な趣きそのまま續いていると詠っている。また、

美酒成都堪送老 美酒の成都 老を送るに堪ふ
當壚仍是卓文君 當壚 仍ほ是れ卓文君

(杜工部蜀中離席)

と、大中六年(八五二)の春、西川節度使杜棕のもとでの任務を終え、梓州の柳仲郢の幕へ歸る際の送別の宴で、杜甫の詩風に倣つて、うま酒の産地である成都は老後を過ごすのにちょうどよい、酒屋には今もかつての卓文君のような美人がいることだと詠う。いずれも蜀という土地に觸發されて相如文君の酒屋に言及する例であり、こうした詠いは他の詩人たちと變わらない。しかし、次の二首は他の詩人たちと着想が異なっている。

花逕逶迤柳巷深 花逕 逶迤として柳巷深し
小闌亭午囀春禽 小闌 亭午 春禽囀る
相如解作長門賦 相如は解く長門の賦を作るも
却用文君取酒金 却つて文君を用ゐて酒金を取らしむ

(戲題友人壁)

この詩はいつ作られたのかわからない。題によれば、李商隱の友人に酒屋を営む者がいて、その友人の店の壁に書きつけた詩であろう。司馬相如が「長門の賦」を作ったことは、『史記』『漢書』には見えないが、作品そのものは『文選』に收められている。おそらくは擬作であろうとされているが、清の顧炎武や何焯に疑義を出されるまでは、司馬相如の作として後世の詩人たちに受け止められていた。李商隱も「長門の賦」を司馬相如の作として、この詩を詠んでいる。武帝の寵を失った陳皇后が、司馬相如に黄金百斤を給えて酒を買おう資金にさせ、「長門の賦」を作らせて武帝に獻じ、再び寵を取りもどしたという話をふまえ、友人は司馬相如のように「長門の賦」を作る才能がありながら、その才を認められず、奥さんを酒屋で働かせて、お客から酒の代金を取らせていると詠う。卓文君が酒屋で働いたことを、相如への愛情のゆえとして肯定的に捉らえ、卓文君は司馬相如が貧乏なのをいやがらないと詠ったりするのが一つの方向として認められるとすれば、李商隱はそれを逆に夫の側から考え、夫が不遇なばかりに妻を働かせなくてはならない、とアイロニカルな諧謔を弄してみせたのであろう。こうした詠みぶりは他の詩人には見られない李商隱の獨自性を表わしていると思われる。また、

君到臨邛問酒壚 君 臨邛に到らば酒壚に問へ
近來還有長卿無 近來還有長卿有りや無きやと
金徽却是無情物 金徽 却つて是れ無情の物
不許文君憶故夫 許さず文君故夫を憶ふを

(寄蜀客)

と、この詩もいつの作か繫年されないが、蜀へ行く人に寄せて、君、臨邛へ着いたら酒屋に聞きたまえ、ちかごろまた司馬相如のような風

李義山詩に詠われた司馬相如

流人がいるかどうかと、相如の彈く金徽の琴はなんとも無情なものや、卓文君に前の夫のことを忘れさせてしまうのだから、と詠っている。他の詩人は、友人の新婚のさまを相如文君の出會いに喩えたり、相如文君の夫婦としての仲の良さを詠ったりはするものの、二人の駆け落ちのいきさつに觸れたりはない。他の詩人は飽くまで日常の範圍で詠おうとしているのである。ところが李商隱は違ふ。あえて二人の駆け落ちのいきさつに觸れる。卓文君に前夫を忘れさせてしまふほどに司馬相如の琴は無情、つまりは逆説的にその蠱惑的な琴の音色を詠っている。李商隱は他の詩人が觸れようとしぬ非日常、相如が琴で文君を誘惑し、文君は相如に夢中になつてしまふという戀愛の場面をこそ詠つたのである。表面上琴に筆をつけてはいるが、李商隱が詠いたかったのは戀の衝動そのものではなかつただろうか。司馬相如が卓文君に琴を奏して挑むことそのものは、他の詩人も詠っている。先の李賀の詩もそうであるし、庾信も、

一弦雖獨韻 一弦 獨韻と雖も

猶足動文君 猶ほ文君を動かすに足る

(和淮南公聽琴聞弦斷)

と、琴の音が卓文君の心を動かすことを詠ってはいる。しかしながら、李賀の詩も庾信の詩も、その主眼は相如文君の戀情を詠うことに置かれていたのではない。やはり、戀愛の機微を詠うことにかけては抜きんでている李商隱にして、相如文君の色戀沙汰の核心を詠いえたのだと思う。

ところで、武田泰淳氏は『司馬遷』(Ⅴ「列傳」について)の中で次のように述べておられる。

司馬相如は武帝と結びついて、「史記」に出現している。彼は

つねに、武帝に愛され喜ばれた。彼の文學は武帝のための文學である。彼は天子を信頼し、漢帝國の發展のために努力した。それ故、彼の文學は肯定的であり、建設的である。また莊嚴でもある。悲壯さの影すらなく、窮することもない。(中略)しかし「司馬相如列傳」に於て、かくも多數の文章を引用しながら、司馬遷は相如の文學について一向に評論しようとはしない。屈原の文學について、あれほど心をこめ、思いをこらして語つた司馬遷が、相如の文學に對しては、ひどく冷淡である。(中略)政治的成功者の文學を、虚辭濫説と見なし、文藝評論に値いせずとなす司馬遷の心は、やはり屈原の憂愁幽思に傾いていたのである。彼がことさらに、司馬相如のあからさまな戀愛物語を記録し、その後華麗な文章を引用したのは、文學者の生活とその文學を、人間的にひきくらべ、語つてみたい氣持からであらう。ここでは、「屈原・賈生列傳」のロマンティックな烈しい精神はない。すべてリアリステックな冷い精神で、筆を振っている。(傍點筆者)

氏の考へによれば、司馬遷は武帝に愛され政治的成功者となつた司馬相如に冷淡だつたゆゑに、ことさらにあからさまに相如の戀愛物語を書いたのである。司馬遷が相如に好意的ではなかつたということは十分ありうることであらう。卓文君との駆け落ちは禮教に反く行爲であり、いわゆるスキヤンダルに類することである。それを詳細に記録したというのであるから、リアリステックな冷たい精神で、筆を振つてゐるとの武田氏の見方は的を射ていると思われる。ところが、司馬遷の恩惑としては政治的成功者となつた司馬相如のマイナス面として駆け落ちの話を記録したはずが、圖らずも、後世の詩人たちには好意的に受け入れられるという結果となつたのである。それでも、劉

宋の謝惠連のように、

雖好相如達 相如の達するを好むと雖も

不同長卿慢 長卿の慢るを共にせず

(秋懷)

と、司馬相如の榮達は好ましく思うものの、その高慢さは見習いたくないと詠う詩人もいる。その高慢さとは、臨邛の縣令と謀つて、貴賓をよそおつたことなどを指すのであらうか。

かように司馬相如は賦の作者としては評價されても、人物としては立派というわけにはいかない、という不均衡のために、一つの側面だけで理想化されたり、美化されたりはしなかつたものと思われる。

三

司馬相如の第三の側面、貧乏だつたことを詠う詩人は、他の三つの側面に劣らないほど多いが、李商隱の詩には一例も見出せなかつた。司馬相如が貧乏だつたのは、梁の孝王亡き後、卓文君との結婚を卓王孫に許されるまでの一時の間のことにすぎないが、『史記』『漢書』に「徒だ四壁立つのみ」と表現されたのが、貧乏の表現として常套となつたことで、よく詠われるようになったのであらう。

左思は、

長卿遷成都 長卿 成都に遷り

壁立何寥廓 壁立 何ぞ寥廓たらん

(詠史詩「八首其七」)

と、四方に壁だけ立っているさまをそのまま詠う。

戒旻は、

悲來却憶漢天子 悲しみ來り却つて憶ふ漢天子
不棄相如家舊貧 相如 家舊貧なるを棄てざるを

(「苦辛行」)

と、貧乏な司馬相如を見捨てなかつた漢の天子を詠い、自分の生きる時世を嘆いた。

武元衡は、

家甚長卿貧 家は長卿の貧なるよりも甚だしく
身多公幹病 身は公幹の病い多し

(「長安敍懷寄崔十五」)

と、自分は司馬相如よりも貧しく、劉楨みたいに病氣ばかりしている
と詠った。

李賀は、

長卿牢落悲空舍 長卿 牢落 空舍を悲しみ
曼倩恢諧取自容 曼倩 恢諧 自容を取る

(「南園」十三首其七)

と、文才のある司馬相如でさえ貧乏で空っぽな家を悲しみ、東方朔さ
えも諧諷を工夫してやっと身を保つたと詠っている。

李商隱は自身の貧乏を詩に詠わないわけではないが、司馬相如に關
するかぎりにおいては、その貧乏のさまには關心が向かわなかつたよ
うである。

四

司馬相如の第四の側面として、消渴を患つたといふことは、茂陵に
隱棲したことも関連して、やはりよく詠われる。司馬相如の病氣を
詠う詩については、鎌田出氏がすでに總括的に論究しておられる。そ

李義山詩に詠われた司馬相如

れゆえここでは、もっぱら李商隱が他の詩人たちとどのように相異し
ているかを中心に考察してみたい。

まず、李商隱以外の詩人たちが司馬相如の病氣をどう詠っているか
を見よう。以下はただ病氣とのみ詠っていて、病名を具體的には詠わ
ない例である。

謝靈運は、

無庸方周任 庸無きは周任に方し
有疾像長卿 疾有るは長卿に像る

(「初去郡」)

と、自分のことを、官吏として用いられないのは昔、「力を陳べて列
に就き、能はざれば止む」と言つた周任のようだし、病氣があるのは
司馬相如のようだと詠う。

庾信は、

茂陵忽多病 茂陵 忽ち多病
淮陽實未痊 淮陽 實に未だ痊えず

(「傷王司徒褒」)

と、茂陵の司馬相如のように急に病氣がちになり、漢の汲黯のように
淮陽で保養しても長くはならなかつた王褒の死を悲しんだ。

王維は、

相如方老病 相如 方に老病
獨歸茂陵宿 獨り歸る茂陵の宿

(「冬日遊覽」)

と、自分は老いて病氣がちになつたゆえ、司馬相如のように茂陵に隱
棲するしかない」と詠う。

杜甫は、

多病馬卿無日起 多病の馬卿 起つに日無く
窮途阮籍幾時醒 窮途の阮籍 幾時か醒めん

〔即事〕

と、司馬相如のように病氣がちな自分はいつ起てるのか、阮籍のように道にゆきつまつた自分はいつ酒の酔いから醒めるのかと嘆く。

牟融は、

閒情欲賦思陶令 閒情 賦せんと欲して陶令を思ひ
臥病何人間馬卿 臥病 何人か馬卿に問はん

〔寓意〕二首其二

と、風雅な心を詠おうとしては陶淵明を想い、病いに臥してはだれが司馬相如のような自分の容態を氣遣つてくれようかと詠っている。

杜牧は、

携茶臘月遊金碧 茶を携へ臘月 金碧に遊べば
合有文章病茂陵 合に文章有るべし病茂陵

〔遊池州林泉寺金碧洞〕

と、十二月、金碧洞に遊んで、茂陵に隱棲した病氣の司馬相如のように、自分だつて文章を作れるはずと自負する。

許渾は、

茂陵間久病 茂陵 間にして久しく病み
彭澤醉長貧 彭澤 酔ふて長く貧なり

〔贈王處士〕

と、自分は司馬相如のように隱居して暇だが長患いだし、陶淵明のように酒に酔うが貧乏だと詠った。

薛逢は、

茂陵自笑猶多病 茂陵自ら笑ふ猶ほ多病なるを

空有書齋在翠微 空しく書齋の翠微に在る有り

〔李先輩擢第東歸有贈送〕

と、科擧に及第した友人に、司馬相如のように病氣がちで隱居しているわが身を自分でも笑いつつ、爲す術もなく山の中の書齋があるばかりさと卑下してみせている。

以上八例、庾信の詩を除いて全て作者自身を司馬相如に喩えている。そのうち五例は「茂陵」に言及する。謝靈運の詩、杜甫の詩、牟融の詩は「茂陵」と言わないが、いずれも官途から退いている状態を想起させる。つまり、司馬相如の病氣を詠う場合、そのまま隱棲を意味として含んで詠うことが多いということである。

では次に、「消渴」または「渴」と、具體的に病名を詠っている例を見よう。

陳の張正見は、

長卿病消渴 長卿 消渴を病み
壁立還成都 壁立 成都に還る

〔置酒高殿上〕

と、人の榮枯盛衰を詠うなかで、司馬相如は消渴を病み、四方に壁しか立っていないほど貧乏になって成都に歸ったという。

杜甫は、

新亭學目風景切 新亭 目を擧ぐれば風景切なり
茂陵著書消渴長 茂陵 書を著わして消渴長し

〔十二月一日〕三首其二

と、異郷の雲安を眺める自分を、亂を避けて江南に移った晋の周顛に喩え、病氣の身で詩を作る自分を司馬相如に喩えた。

白居易は、

備於嵇叔夜 嵇叔夜よりも慵まごり
渴似馬相如 渴くこと馬相如の似し

〔酬令狐留守尙書見贈十韻〕

と、すでに致仕した自分は嵇康よりも怠惰だし、病氣でのがれぬのは司馬相如のようだと詠う。

許渾は、

老信相如渴 老いては相如の渴まがに信せ
貧憂曼倩飢 貧なるは曼倩の飢を憂ふ

〔早秋〕三首其二〕

と、老いた自分は、司馬相如のようになどが渴まがくはまかせ、貧しいので、食たいしん坊ばの東方朔ばくのように飢うえることを心配していると詠っている。

温庭筠は、

子虛何處堪消渴 子虚 何處にか消渴しょうかくに堪へん
試向文園問長卿 試みに文園に向かつて長卿ちやうせいに問はん

〔秋日旅舍寄義山李侍御〕

と、李商隱を司馬相如に喩え、君はどこで消渴しょうかくの病びょういに耐たえているのか、ちょっとご容態ようたいを伺うってみようかと詠う。

やはり杜甫、白居易、許渾は自分を司馬相如に喩えて詠っている。

病名を具體的に言う場合でも、要するに病弱であることを表現している點で、ただ病氣と言つて病名を言わない場合と、これといつて相違點はない。詩人たちは約説すれば苦境に立たされていることを、老い・病い・貧乏を詠つて表現したのである。それゆゑ、鎌田出氏が先に擧げた論文の中で、〈本來の疾病としての文脈から離れた「消渴」は、スーザン・ソントグの言葉を借りるならば、まさに「隱喩」として

李義山詩に詠われた司馬相如

の病い」と呼び得るものである」と述べておられるように、詩語としての「多病」「老病」「消渴しょうかく」は、現實の病氣とは少なからず乖離するものと考えてよからう。

では、李商隱はどのように司馬相如の病氣を詠っているであろうか。

まず、他の詩人たちと同様な詠い方をしている例を擧げよう。

休問梁園舊賓客 問ふを休めよ梁園の舊賓客に
茂陵秋雨病相如 茂陵の秋雨 病相如

〔寄令狐郎中〕

會昌五年（八四五）秋、李商隱は洛陽にあつて令狐綯からの手紙に答へ、梁園のかつての客だった私のことなど、お氣にかけて下さいますな、今の私は茂陵の秋の雨に降り籠められた病氣の司馬相如みたいな有様なのですからと詠った。官途を退いている自分を茂陵の相如に喩えるのは他の詩人の作にも見られる常套表現である。

しかし、次の例は他の詩人たちとは異なる。

嗟餘久抱臨邛渴 嗟 餘久しく抱く臨邛の渴
便欲因君問釣磯 便ち君に因つて釣磯を問はんと欲す

〔令狐八拾遺綯見招送裴十四歸華州〕

開成元年（八三六）冬、李商隱は令狐綯に招かれ、おそらくは令狐家の婿となつてゐる裴十四が華州へ歸る送別の宴に出席した。裴十四は仕官もし妻も娶り、順風満帆。科擧にも及第せず、妻帯もしていない李商隱にとつては羨ましいかぎりである。その詩に、ああ、私は長い間司馬相如のようにのがれぬところにいる、裴君にすぐにも聞きたい、かの太公望が釣りをしていた磯の場所を、と詠うのも肯ける。どうしたら君のように仕官も結婚もできるのか、と羨望の氣持を率直に表現し

ている。ここで詠われている「臨邛渴」はもはや病名を意味しない。仕官と結婚への「渴望」のメタファーとして機能しているのである。他の詩人たちは司馬相如の消渴、または渴を少なくとも病名として詠っていた。具體的な病氣に結びつかなくても、病氣として詠うという線は崩していない。ところが李商隱は相如の渴に「渴望」という意味を込めたのである。これは他の詩人、少なくとも李商隱以前の詩人たちの發想にはなかった。先に挙げた李商隱の「從翁の東川の弘農尙書の幕に従ふを送る」と題する詩の「中は乾き瘡を病まんと欲」という句も、やはり仕官への「渴望」の隱喩なのである。

さらに相如の消渴が「渴望」の隱喩となつてゐる例を挙げよう。

紅蓮幕下紫梨新 紅蓮幕下 紫梨新たなり

命斷湘南病渴人 命は斷つ湘南病渴の人

今日問君能寄否 今日 君に問ふ能く寄するや否や

二江風水接天津 二江風水 天津に接す

〔寄成都高苗二從事〕

大中元年（八四七）秋、李商隱は桂管の鄭亞の幕にあつて、座主の李回の幕下にいる成都の高、苗二人に詩を寄せた。その詩に、李回殿のもとにおられる高君も苗君も、紫梨の花が咲いたばかりのようにお元氣そうだが、私は命運盡きて、桂管で消渴を病んでゐる有様、今日、君たちにお願ひできるだろうか、君たちは蜀の二江が天津に接しているように李回殿にお會ひできるだろうか、私のことをよろしく傳えてくれたまゝと詠じてゐる。高・苗二君を通じて李回の援引を望んでゐるので、それが「渴望」の内容であるが、ここは單なる社交辭令にすぎないとも考えられる。しかし、社交辭令だとしても、「病渴」の「渴」はやはり「渴望」のメタファーとして詠われていることに變わ

りはない。

司馬相如の消渴を誇張して詠っている詩もある。

十頃平波溢岸清 十頃の平波 岸に溢れて清し

病來唯夢此中行 病來 唯だ夢む此の中に行くを

相如未是真消渴 相如 未だ是れ眞の消渴にあらず

猶放沔江過錦城 猶ほ沔江を放ちて錦城を過ぎしむ

〔病中早訪招國李十將軍遇擊家遊曲江〕

この詩がいつ作られたのか、確定はできないが、おそらくは開成二年（八三七）秋の作ではないかとされている。その年の春、李商隱は進士に及第している。詩題によると、李商隱は病を押して、ある朝招國里の李十將軍を訪問したが、たまたま一家で曲江へ遊びに出かけて留守だったという。そこで李商隱はその詩に、病氣の間、ずっといっしょに曲江に遊ぶことを夢に見ていたのに、その機會を逸してしまった。私はどんなにかごいっしょにしたいと渴望していたことか、それに比べたらかの司馬相如など本當に消渴を病んではいなかったにちがいない、沔江の水を飲みつくして干上がらせもせず、錦城まで流れさせていたのだからと詠った。なんと大袈裟な表現であらう。ただいっしょに遊ぶ機會を逸しただけのことを悔しがるには詠みぶりが大仰すぎる。

しかし、馮浩の説によれば、この詩は二首の連作だったらしく、その第二首を見ると、李商隱の殘念がる氣持に納得がゆくのである。

家近紅蕖曲江濱 家は近し紅蕖曲水の濱

全家羅襪起秋塵 全家の羅襪 秋塵を起たす

莫將越客千糸網 越客の千糸の網を將つて

網得西施別贈人 西施を網し得て別に人に贈る莫かれ

李十將軍のお宅は赤い蓮の花が咲く曲江に近く、今日、ご一家で遊びに出かけられたよし、ご婦人がたの靴下がほこりをたてた様子が目に浮かぶようだ。どうか、昔越客の網が引き上げた西施のようなあの女性を、ゆめ他の男に嫁がせたりしないで下さいよ。

李商隱は、李十將軍のもとにいるある女性を所望していたのである。その女性は後に娶ることになった王茂元の娘だとする説もあるが、確かではない。李商隱はさる女性をわがものにしたたいと、渴望するあまり、第一首であんなにも大仰な表現をしたのである。ところで、西施を網で引き上げるといことは、史實にはないようである。明の楊慎が、『墨子』に「西施の沈むこと其れ美し也」と見え、『修文御覽』に引く『吳越春秋』の逸篇に「吳亡びし後、越 西施を江に浮かべ、鴟夷に隨ひ以て終はら令む」と見えるという（『升菴全集』卷六十八）のによると、西施が水に沈められたという傳聞があつたらしいことが窺われる。しかし、沈められた西施を網で引き上げるといのは、あるいは李商隱が發想したフィクションかもしれない。李商隱にはフィクションを詠う傾向がある。第一首で、司馬相如が沱江の水を飲むと假定したのも李商隱のフィクションなのである。

ここで、李商隱がフィクション、つまり文學的虚構についてどのようか考へていたのかを検討してみよう。それには次の詩が参考になる。

非關宋玉有微辭^① 宋玉に微辭有るに關はるに非ず
却是襄王夢覺遲 却つて是れ襄王夢覺むること遅し

一自高唐賦成後 一たび高唐の賦成るより後

楚天雲雨盡堪疑 楚天の雲雨 盡く疑ふに堪ふ

〔有感〕

李義山詩に詠われた司馬相如

詩に「微辭」というのは、宋玉の「登徒子好色賦」に、宋玉をそしる大夫登徒子の言葉として「玉の人と爲りは、體貌 閑麗にして、口に微辭多く、又た性 色を好む」とあるのをふまえているのであろう。「微辭」とは本來、仄めかしの意味であるが、人をそしる言葉としては「巧言」に近い使い方をしているらしい。李商隱はそれを本來の意味にもどし、宋玉の賦における神女の存在の仄めかしとして詠っている。宋玉の「高唐賦」及び「神女賦」によれば、神女を夢に見るのは、もともと先王懷王と宋玉自身だったが、後世、襄王が夢みたとする例は多い。李商隱も襄王が夢みたこととしている。ともあれ、その詩に、そもそも神女のごときは、宋玉が賦の中で仄めかしたのとはかわりなく、襄王が夢から覚めるのが遅かっただけのことで、本來、夢の中の話だったはずであるが、いったん宋玉の「高唐賦」ができてしまつてからは、現實の楚の空の雲も雨も、はて神女の化身かと思えてならなくなつてしまつたと詠っている。

李商隱は神女の話をも「夢」すなわち非現實であると認めたらうで、あらためて、宋玉の「高唐賦」として虚構の文學となるや、俄然として現實の楚の雲雨が神女の存在を物語るほどに存在感を持ちはじめたと言ふのである。つまり李商隱は、ただの非現實の話が虚構の文學として再構築されると、現實よりも現實らしくなる、すなわち文學そのものとして價値を持ちはじめると主張しているのではなからうか。そうであるとするれば、李商隱は文學的虚構を肯定し、評價していると思ふことができる。彼が自身の詩作において、虚構を詠うことに積極的であつても不思議ではない。

李商隱にはもう一首司馬相如の消渴を詠う詩がある。

青雀西飛竟未廻 青雀 西へ飛んで竟に未だ廻らず

七七

君王長在集靈台 君王 長に在り集靈台
 侍臣最有相如渴 侍臣 最も相如の渴有るも
 不賜金莖露一杯 賜らず金莖の露一杯

(漢宮詞)

この詩は、會昌五年正月に武宗が望仙臺を築いたことを諷刺したものだとする説がある。また、諷諫の詩ではなく、仕官できない自分を嘆いたものだとする説もある。そもそも詩題から見ても、詠史詩に類別されるので、表面上はあくまで漢の武帝の時代について詠われている。ごく典型的な詠史詩であるならば、懷古の情や無常感を詠うはずであるが、淺見洋二氏が「李商隱の詠史詩について」の中で「それら李商隱独自の詠史詩の特質をあえて一言でいうなら、過去の歴史像そのものを自らの觀點から組み換え再構成し、そこに極めてアイロニカルな批判性を呈示すること、である」と述べておられるように、李商隱の詠史詩は、これまた氏の言葉を借りるならば、「(懷古)構造を相對化し解體することをその最も根底的な態度として有していた」ので、漢の宮廷のことを詠った詩なら、漢の宮廷についての作者の感懷を讀み取れば事足りる、というわけにはいかないのである。そこで、様々な寓意を讀み取ろうとする解釋が生じてくる。筆者も、表層において解釋しても納得のいくものが得られない以上、寓意すなわち深層における解釋を試みるべきであると思う。ただ、ここでは筆者なりの方法でアプローチしてみたい。

先に述べたように、李商隱はしばしば司馬相如の消渴を「渴望」の隱喩として詠っている。また、自己の表現したいことのためならば、フィクションを詠うことも辭さない。むしろフィクションを詠うことに積極的である。これらの觀點から「漢宮詞」を見たならば、この詩

の「相如の渴」は「渴望」の隱喩として機能しておかしくないし、そもそも武帝が承露盤に置いた露を司馬相如に賜うとか賜わないとかいうのは明らかにフィクションであるといえる。現實の司馬相如は武帝に厚遇された政治的成功者なのである。この詩は實のところ、現實の司馬相如など描いていない。この詩の司馬相如は、現實の司馬相如という意味内容をすっかり抜き去られた空っぽの容れ物にすぎないのである。

高橋和巳氏は『詩人の運命——李商隱詩論——』第二章に次のように述べておられる。

李商隱の場合には、往々、そのもとの物語や寓話が本來意味する範圍を逸脱し、あるいは擴大變容されて、彼自身の文學への執着が假託されることのあるのが注目される。

李商隱は「漢宮詞」において、まさに本來意味する範圍を逸脱し、擴大變容した武帝と司馬相如の「虚」を描いたのである。何のために？と、その深層に入っていくならば、筆者はやはり、李商隱自身を描くため、この詩は隱喩としての自畫像なのだと思いたい。どんな具體的事實と結びつけるかはしばらく措くとして、この詩は、どうしようもない不條理の中で何かを「渴望」する李商隱自身が描かれたものであると思う。

結び

司馬相如をどう詠うかというきわめて限定された中で、李商隱と他の詩人とを比較してきた。總括すれば、賦の作者としての司馬相如は後世の詩人たちに尊敬の念をもって受け入れられ、詩人たちは自分を相如に喩えて自負したり、人を相如に喩えて褒めたりしている。李商

隠にとつては、賦の作者としての相如はいささか遠い存在だったようである。卓文君とのロマンスとなると、詩人たちは親近感を覚え、好意的に詠う。李商隱も同様であるが、二人の駆け落ちのいきさつに直接觸れる詠みぶりは、他の詩人たちと異なる点である。ただ、詩人たちの慣例であろうか、自身のロマンスと結びつけて詠うということは誰もしていない。司馬相如の貧乏を詠う詩人も多いが、李商隱は詠っていない。際立って李商隱と他の詩人とが異なるのは、司馬相如の病氣を詠うときである。

李商隱は相如の消渴を「渴望」の隠喩として詠った。これは彼以前の詩人には見られなかった詠い方である。温庭筠はそれを知っていたのだろうか、「子虚 何處にか消渴に堪へん」と、李商隱を司馬相如に喩え、その消渴を詠っている。また、後の羅隱は「知らず一盞臨邛の酒、相如の渴病を救ひ得るや無やを」(「聽琴」)と詠い、李商隱の「漢宮詞」の「露一杯で相如の渴を癒す」という發想を應用して、今度は酒一盞で相如の渴を癒せなかつたかという。しかし、それはあくまで表層における模倣であつて、羅隱の詩の「渴病」は「渴望」のメタファーとはなっていない。

李商隱が他の詩人たちとさらに異なるのは、相如の消渴を「渴望」の隠喩として詠うばかりではなく、詩の中に同時に虚構を詠いこむという点である。李商隱は隠喩と虚構とを用いて、二重構造の詩を詠って自己の言いたいことを表現した。それゆえ、彼の「漢宮詞」は、表層としては詠史詩でありながら、深層としては作者自身の自畫像となつて見做せるのである。

注(1) 李商隱以外の詩人の詩は全て、逕欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』及

李義山詩に詠われた司馬相如

び中華書局排印『全唐詩』に據る。

(2) 唐詩百名家全集本『李商隱詩集』巻下には「未至」に作るが、他本によつて「未至」に改めた。以下、李商隱の詩は、唐詩百名家全集本(席本)に據る。

(3) 李商隱の詩の繫年は、中華書局『李商隱詩歌集解』の劉學鍔・余恕誠の按語に據つた。

(4) 中華書局排印『全唐詩』(以下『全唐詩』とのみ稱す)巻二十六には、同一の詩が羅夷中の作として見える。

(5) 『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩卷四のこの詩に付す逕欽立の案語には、謝靈運の作とする考證がある。

(6) 「司馬相如の病——唐代詠病詩と消渴——」一九九一年『中國詩文論叢』第十集所收。

(7) 『全唐詩』巻五百四十九には、同一の詩が趙儼の作として見える。

(8) 「消渴」という言葉自體は、いわゆる詩語とはいえないが、本稿において、括弧つきで含められようか。

(9) 席本には「紫梨」に作るが、他本によつて「紫梨」に改めた。

(10) 『玉谿生詩集箋注』巻一の「又一首」に付された馮注に「舊作寄成都高苗二從事、誤也。戊籤作失題。余定其必爲上篇之次章、故作又一首。」と見える。

(11) 席本には「徵詞」に作るが、他本によつて「徵辭」に改めた。

(12) 『李義山詩集箋注』巻上の「漢宮詞」の程夢星按語には「：愚見專爲武宗也。考武宗會昌五年正月築望仙臺於南郊、則次句比事屬詞、最爲親切也。」と見える。

(13) 『玉谿生詩集箋注』巻一の「漢宮詞」の馮浩のことばに「武宗朝、義山閑居時多、借以自慨、非諷諫也。」と見える。

(14) 『文化』第五十卷第三・四號(通卷二九六・二九七號)一九八七年所收。